

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者 鈴木 孝 (心身科学研究科健康科学専攻 博士後期課程)

論文題目

HPV ワクチン接種経験と子宮頸がんに関する認識および検診行動との関連

—A 看護専門学校における調査—

(論文内容の要旨)

【目的】子宮頸がんに対して、思春期女性が適切な意思決定や予防行動の選択ができるよう健康推進活動を実行していくための基礎的データを得ることである。

【方法】2015年1月、看護専門学校在学中の現役で入学した女子学生273名に、倫理的配慮のもと無記名自記式の質問紙調査を実施し、有効回答248名を調査対象とした。調査内容は、学年、HPV ワクチン接種の有無と接種状況、子宮頸がん検診経験の有無と状況、子宮頸がんとHPV ワクチンおよび子宮頸がん検診に関する認識と情報源等である。

【結果】子宮頸がんワクチンを接種した学生は138名(55.6%)であった。接種した理由で最も多かったのは、「両親に勧められたから」が95名(68.8%)、次いで「学校で勧められたから」が52名(37.7%)であった。ワクチン接種で困ったことがあると答えた学生は3割近くあり、その理由の約7割が「筋肉痛・腕が痛い・腕が上がらない・腫れた」という症状であった。子宮頸がんワクチンを接種していない学生は110名(44.4%)であった。接種していない理由で最も多かったのは、「副作用がある」が48名(43.6%)であった。また、検診経験のある学生の割合は、ワクチン接種ありの学生では37名(26.8%)と、ワクチン接種なしの学生12名(10.9%)と比べて、統計学的に有意に高率であった($P=0.002$)。

【結論】ワクチン接種率を向上させることによって、検診の受診率の向上に繋がることが推察され、ワクチン接種時あるいは接種後に検診の必要性について啓発の強化が望まれる。また、子宮頸がんを予防するためには、情報ヘルスリテラシー能力を思春期の女子と保護者共につけることが健康推進活動に必要と考えられる。